



2010・6

**SORA** 31号

桜鯛

柴田 佐知子

山菜を濃く煮て春の祭かな

桜鯛鱗飛ばしてややくすむ

破られし約束混じる花吹雪

枢鎖す釘に選ばれ油まじ

霊枢車桜映して動きだす

桜より押し出されたる霊枢車

墓穴は人待つばかり蒙古風

地震の傷ゆつくり癒えて山桜

拭き上げて祇園のさくらさくらかな

都をどり大路の色をあつめけり

夕暮の道ばかりなり糸桜

太宰府

その裾は紫雲英田となる水城跡

梅林を抜けて草餅まだぬくし

蝶のあと誰とも会はず戒壇院

まくなぎを仏陀の方へ払ひけり

都府楼跡

うつむきて憶良が歩む霞かな

青々と雨脚揃ふ旧端午

耳遠き父へ母へと新茶くむ

## 母の日

樋口みのぶ

たんぽぽを啣へる牛に見られけり  
菜の花やたて笛吹いて下校の子  
木造の駅舎磨かれ白つつじ  
まづ兄がとんでみせたる春の泥  
池の面の端より暮るる藤の花  
薔薇の蔓こみ合ふ薔薇の字のやうに  
母の日の墓石撫でてゐたりけり  
歩くほど青葉の空となつてきし

## 花ミモザ

中条さゆり

蝌蚪生れて村の静かに動き出す  
上り籜大きな月の上がりけり  
磯遊び子供はすぐに濡れたがる  
いかのぼり糸の消えゆく高さかな  
台車にて運ぶ甘茶の大やかん  
三方より三角波や仏生会  
合併に佳き名消えゆく桃の花  
花ミモザほめて予約の歯科医院

# 灯明

松田明子

# 山笑ふ

苑実耶

短刀もあり姫君の雛道具

十二単軽々と着て紙雛

箱書も添へし旧家の古雛

毛氈にあまる園児や涅槃寺

灯明に揺れ涅槃図のとりけもの

獣より虫の大きく涅槃絵図

白象の皺の振れし涅槃絵図

菩薩・鬼畜隣り合せの涅槃絵図

三月や庭にめぐらす伸子張り

金銀を昔は壺に山笑ふ

摘み草や祖父編みくれし竹の籠

吸物に落したまごや桃の花

骨壺をきつちり包む花の昼

潮干狩みごとな足をさらけ出し

頬寄せて幹の声聞く桜守

夜桜や男言ひ訳用意して

## 春の雪

鳳 蛮 華

## 銅鏡

あさなが捷

蝶ひとつ豪華客船ひた昇る

校倉のみちびき給ふ椿道

神将の構へとりどり蒙古風

泡吹いて涅槃図の蟹嘆きをり

ゆつくりと土塀溶けゆく落椿

母恋へば膚に溶くる春の雪

花冷えの遺品に異国案内書

電車いま余力で走る窓若葉

興亡の果ての大地や霾れり

流し雛目を逸らさずに遠ざかる

繰り言は子守唄にも春の月

装ひて桜の夜となりにけり

砕かれし銅鏡一面のれんげ畑

たんぽぽや犬抱かれてもらはれし

玄海の藍より生まれ桜鯛

薫風や並んで帰るランドセル

# 冤罪

吉村 撰 護

あたたかし 大地 真理

啓蟄や海底トンネル漏水す

焼きし山むらさき色に黄昏るる

風を読み潮読む漁師桜鯛

啓蟄や古墳に大き南京錠

酷使する百骸九竅竹の秋

継ぎあたる父の着物やあたたかし

冤罪や弦八方に豆の花

花吹雪いつも開きぬる不開門

揉み上げて玉露の釜の磨かるる

まばたきの多き若僧杉の花

山滴る頂上の宮一番地

踏台にあがりて稚児の灌仏会

春深し釈迦堂裏の蒸留器

地虫出てひたすら前へ進みけり

梅干すや筵は父母の代よりの

客あれば手漕ぎの渡しのどけしや

## 更衣

高倉恵美子

廃校の庭の土筆を採りにけり

新しき隣人誘ふ花筵

村中で育ててゐたるチューリップ

通院の道に草笛吹いてみる

筍に声かけていく小学生

筍を届け新茶を貰ひけり

いつよりか正座叶はず更衣

どんたくを遠くに風の中をり

## 水鱧

堀江恵子

精いつぱいぐるりくるりと冷し瓜

流れ癖のままの宛名や山雨の忌

朴の花まだ髪知らぬお六櫛

信心の薄きしやぼん玉いびつ

汽車道の空一箱に蓬餅

水鱧や横にしてとく箸の帯

水煙を奉りたる水田かな

うすものにうすもの羽織り嘘を言ふ



# 暮れ遅し

安武 晨子

暖かや日を漉き込めて和紙処

ひとりにはひとりの工夫風薫る

身に添はぬ杖を春野に誘ひけり

杖で指すことも覚えて春うらら

方丈は経書に埋もれ花大根

春蘭の庭によき日の続くかな

老ゆもよし桜古木の年輪も

くつろぎの畳六畳暮遅し



空作品抄  
柴田佐知子抽出

大空に鳥の賑はひ旧端午

仏に侍すかくも涼しく黒を着て

一八にきれいな声で話しかく

蝌蚪ぬけしあとの紐かと思ひけり

ミサイルの射程圏内枇杷をもぐ

少年が怒つたやうに髪洗ふ

手を上げし位置がバス停島うらら

蟬の殻命半分あるやうな

母の日の墓石撫でてゐたりけり

いかのぼり糸の消えゆく高さかな

引鶴を空の隠してしまひけり

潮干狩みごとな足をさらけ出し

福岡

高倉 和子

東京

中田みなみ

長崎

荒井千佐代

埼玉

服部 早苗

福岡

柴田志津子

糸島

小林 朱夏

福岡

矢野百合子

粕屋

秋 千晴

福岡

樋口みのぶ

福岡

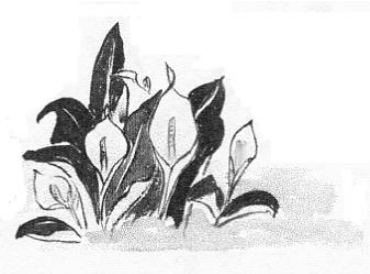
中条さゆり

熊本

松田 明子

須恵

苑 実耶



母恋へば膚に溶くる春の雪

砕かれし銅鏡一面のれんげ畑

冤罪や弦八方に豆の花

いつよりか正座叶はず更衣

水鱧や横にしてとく箸の帯

死すれば蝶秘すれば花と存へて

花曇り寄せて祀れる五穀神

遠き世の母を近くに木の芽和

老鶯のつなぐ地獄絵来迎図

スペースシャトル帰還して竜天に

結界も蹠も冷えて植木市

階に杉の焦げつ葉修二会果つ

ゆつくりと香煙撓ふさくらかな

おちよぼ口して公魚の釣られたり

長崎

鳳 蛮華

福岡

あさなが捷

福岡

吉村摂護

うきは

高倉恵美子

大阪

堀江恵子

糸田

宮井知英

粕屋

長 憲 一

行橋

安武晨子

大阪

堀江恵子

福岡

大地真理

宇治

池田華甲

八尾

田岡千章

福岡

矢野百合子

粕屋

吉田文三

茫洋と某月某日春は行く

福岡

栗原京子

征伐を果して五月人形かな

福岡

白水良子

桜の夜姫ともなれば蛇ともなる

須恵

長節子

風にのり色変はりたるしやぼん玉

神戸

石川叔子

あをによし奈良の都の花ぐもり

羽曳野

織田高暢

春嵐言葉少なき子の見舞

山梨

野畑小百合

楠若葉幼子と押すべビーカー

東京

今井春生

野火走り翼竜生まれ出でんとす

東京

古川夏子

花ひらく夢すでに見し種袋

横浜

小川涼

恐竜は草食といふ青き踏む

東京

山田正子

黄塵に夕日の沈みかねてをり

大阪

青木朋子

髪切れば春の愁ひもなかりけり

福岡

亀井紀子

大の字のまま蓮華の畑に死す

萩

岸千手

どんたくが博多の街を塗りつぶす

福岡

田代貞枝



うねうねと乗合バスや花菜風

猿岩は帰るとこなし青葉潮

グループで駆込み寺の花の礎

岩風呂に春の怒濤や石廊崎

叱られて自分の影と馬鈴薯の花

母の日の玄関脇に乳母車

立春の助産師の名札白光す

結納を確かに納め八重桜

病衣とは仮の姿ぞ山笑ふ

菖蒲湯や「耳拭かな」と亡き母の声

一切の関りを断つ林檎むく

さくら満開名水は花鏡

そこまではまだ歩けるぞ若楓

爪研いでゐる玻璃籠めの恋の猫

福岡

山内 碧

福岡

桜三奈子

福岡

ふじの茜

東京

清水量子

福岡

犬丸勝子

東京

遠山のり子

下関

乾 聡美

佐賀

堤 堅策

山梨

中原俊之

北九州

片田きく

福岡

野田美子

福岡

川崎よしみ

福岡

神谷耕輔

宇美

内藤玲二